

黒住教 ホームラーニング #3

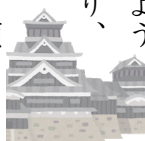


黒住教は、備前岡山藩の守護神社・今村宮の神宮であった黒住宗忠が、江戸時代（一八一四年）に開いた教派神道です。死を覚悟するほどの病を克服し、昇る朝日を拝む「日拝」の最中に天啓を得て、天照大御神と一体になるという宗教的体験をして立教しました。教祖宗忠神の教えは、一切万物すべての親神が天照大御神で、その尊いはたらきの中であらゆるものが存在するという世界観です。

実践

我がためを思い離れて人のため 尽くす心ぞ誠なるらん（道歌）

江戸時代後期のこと。当時の備前岡山藩主池田家より、宗忠は紋服（黒色の羽織）をいただきました。お殿様からの贈り物です。すから普段は大切にしまっていて、大切な用事の時だけ着るようになっていました。ある日、岡山城へ御用で出かけることになり、この羽織を着て出かけることにしたのでした。



お城にいた最中、にわか大雨が降り、ご用が終わって帰る頃には雨がやんでいました。帰宅した宗忠を出迎えた妻は、玄関で思わず驚きの声を上げました。大切にしている羽織が泥だらけになっており、しかも、雨に濡れたぐらいいでは付かないような、ひどい汚れになっていたのです。

妻の驚きの表情を見た宗忠は、はじめて羽織の状態に気がつきました。つい先ほどの大雨で、家の先の小川にかかっている土橋に穴ができてしまっていました。宗忠はすぐに羽織姿のままその穴をふさいだので、汚れてしまったことを妻に話しました。

妻「一度、お帰りになって、着替えてからになさったら良かったのでは…」

宗忠「わずかな時間でも、放っておけない気がしての…。あの穴に足がはまって怪我をする人がいてはいけません。羽織も大切だが、人の足はなお大切だから」と、やさしく答えたという話でした。

ポイント

自分の大切な紋服が汚れてしまうのもいわず、人のためにすぐさま行動したのでした。現代社会を生きる私たちも、この姿から学ぶべきことは大いにあると思います。

たとえば、ゴミ箱のまわりでゴミが散らかっていたら、自分の手が汚れるかもしれませんが片付けることができる人になりたいものです。他者のための行いを実際に行動に移せるかどうか、大きなポイントになってくると思います。

人のために行動できる心を養ってまいりましょう。



☆このお話を読んで

あなたは人（他者）のために行動し、実践したことがありますか。何も特別なことでなくても結構です。思い当たることを、素直な気持ちで□に✓を入れてみてください。

- ある ない その他

「ある」とした方は、その行動や実践したことの内容をお聞かせください。その後、ご自身や周囲に起こった変化があれば教えてください。「ない」とした方は、人のために何かできることがありますか、あるいはしないか考え、実現できそうなことを記してください。

○「黒住教ホームラーニング」では、黒住宗忠神の教えをわかりやすくお伝えすることを目指しています。本来であれば「教祖神」「宗忠神」等をはじめとした敬称の表記をするべきところを、編集上、あえて敬称を略した表現とさせていただきます。

親孝行

信心とは

信ずる心ー信す心ー信の心（教語）



宗忠が幼い頃、ある雨上がりの日のことでした。外へ出ようとした宗忠に対し、父親は「まだ雨で道があぶないから、下駄を履いていきなさい」と言いました。門のところまで出ますと母親が「道はもう乾いているから草履で出かけなさい」と言いました。それぞれ両親が違うことを言うのです。

前項「実践」で、宗忠は備前岡山藩主池田家より羽織をいただいたと紹介しましたが、宗忠は幼少の頃から「親孝行」で知られ、この時もうすでにお殿様から「親孝行な子ども」として何度も表彰されていました。そうした宗忠少年は、「両親が言うことに間違いはない」と信じ切り、片足に下駄、片足に草履を履いて外に出かけたのでした。

宗忠がもう少し成長して、書道塾に通っていた時のこと。それまで熱心に練習にはげんでいるのですが、夕方ごろになるといつも決まってソワソワとして帰りを急ぐ様子を見て、先生が理由を尋ねた際、「いつも必ず門のところまで出て、私の帰りを待っていてくれる母に心配をかけたくないものですよから」と答えたと言えられています。いずれも、幼心に両親のことを信じ切り、心配をかけないようにする姿勢が伝わってきます。

ポイント

☆このお話を読んで

「孝行のしたい時分に親はなし」（江戸時代の川柳集「俳風柳多留」）という言葉をごどこかでお聞きになったこと「誰しも、子どものいない人はあるかもしれませんが親のいない人はありません。親孝行というものに向き合い、考え、行動することで、人としてあるべき姿が見えてくるのではないのでしょうか。宗忠の弟子は「幼な児の親を慕える心もて神に仕うを信心という」という和歌を詠みました。

あなたは「親孝行」をしたことがありますか。
に✓を入れてみてください。 ある ない その他
 「ある」に✓をした方は、どのような親孝行だったのでしょうか。父の日や母の日にプレゼントを贈ることや、その他のこともあればぜひ教えてください。「ない」に✓をした方は、もしかしたら「この程度で親孝行になっているとは思えない」という場合もあるかもしれません。今後、やってみよう、試してみようという親孝行の姿やイメージがありましたら、その考えを聞かせてください。

奇跡

波風をいかで鎮めん 海津神

天つ日を知る人の乗りしに

(黒住宗忠)



江戸時代後期、宗忠が岡山の港から小豆島方面に向かう船に乗った時のこと。現在の岡山市南区小串というところで、にわか吹き荒れた突風と波のうねりに巻き込まれ、転覆の危機となりました。他の船に乗っていた人達も海に放り出され救いを求めているような非常事態となっています。船頭が「この船ももう沈んでしまいます。皆様、お覚悟を…」と声をあげた時、それまで目を閉じていた宗忠は、静かに紙と筆を取り出し、一首の和歌を書きました。そして、その歌を大波が押し寄せる海に向かって投げこんだのです。

その途端、今まで荒れ狂っていた波風が鎮まり、宗忠が乗っていた船はもとより、周囲のおぼれかかっていた人々も無事に助けられたのでした。その時に詠んだのが冒頭の和歌で、意味は「この波風はいかにしたら鎮まるというのだ、海の神よ。この船には、天照大御神様のお徳を知っている人（宗忠自身のこと）が乗っているというのに」といった意味になります。いつもは笑顔で丸くおらかな宗忠ですが、この時ばかりは海をつかさどる神様に対して、ある意味で叱りつけるような気迫でもって詠んだ和歌でした。

ポイント



こうした奇跡的なお話にふれると、人によって様々な受け止め方があることでしよう。「本当かな？」と思う人もあるかもしれません。このお話には続きがあります。宗忠が亡くなった後のこと、宗忠の弟子が今の鳥取県で、小串沖の大嵐にまきこまれ、海でおぼれて命拾いをしたという人に出会いました。この人は嵐の当日、宗忠が和歌を海に投げ入れ、やがて海が静けさを取り戻したという一部始終を知る、まさに「生き証人」なのでした。この人物は遭難した当時、宗忠のことを有名な歌道の先生と信じていたようですが、のちに宗忠の人柄と教えにふれ、弟子のひとりとなったのでした。長い人生で、何時こうした奇跡に遭うかわかりません。その奇跡に接したとき、人の心は熱くなり、人に伝えたいと願うものなのでしょう。

☆このお話を読んで

あなたには「奇跡的」な体験をしたことがありますか。
に✓を入れてみてください。 ある ない その他
 「ある」に✓をした方は、どのような体験だったのでしょうか。奇跡とは人によって様々ですので、その体験をぜひ教えてください。「ない」に✓をした方は「この程度は奇跡とは思えない」と遠慮のような気持ちがあるかもしれません。周囲の人の話や体験談など、エピソードがあれば聞かせてください。ここでは「奇跡」が主体ではなく、感動と感謝の心が、どのようにすれば人に伝わるか、伝えられるかということを考えていきたいと思っています。

感謝

天照らす 神の御徳は 天つちに
みちてかけなき 恵みなるかな

(黒住宗忠)



宗忠は、各地に出かけてお話をすることが多く、宗忠の話
を聞きに来る人も様々で、とても楽しみにしていました。

そうしたある日のこと、いつもと同じように人々に向かつて
お話ししていますと「天照大御神様のお徳は、この天地自然
いっばいに満ちて欠けることがない恵みなのです。」という
ことを話していた時、口からスラスラと出てきた言葉が冒頭
の和歌（五七五七七）のかたちにまとまったので、宗忠も
「おっと、今のは歌になりました」と、驚きつつも生まれた
のがこの歌なのでした。

これは、和歌をつくろうと意識してできたものではなく、
ごく自然に口をついて出てきたものだけに、味わい深いもの
になっています。

黒住宗忠の教えは「黒住教」として現代に伝わっていま
す。黒住教・宗忠の教えを信じる人達はこの和歌を食事の前
に「食前の祈り」として唱えています。これまでに、ホーム
ラーニングでは様々な宗忠の歌を紹介しましたが、その中で
も最も生活に身近なのがこの歌で、意味する大切なところは
皆様にもよくわかりただけのことと思います。

ありがとう!

ポイント

この項では、普段何気ないことに対する感謝について学び
たいと思います。天地自然への感謝というと、スケールが大
きすぎますが、私たちの周囲にはたくさん感謝できること
や、すべき場面ばかりです。当たり前だと思っていたこと
が、実は有り難いことだったということを、コロナ禍により
多くの人が気付かされました。宗忠は一杯のお茶を淹れてく
れた妻に感謝して拝み、履いていた草鞋が傷んで新しい物に
替える時、古い草鞋に感謝の祈りを捧げてから取り替えまし
た。言葉に出す感謝の気持ちは、相手に伝わるとお互いに気
持ちよいものです。ある意味、気恥ずかしいことかもしれま
せんが、素直な気持ちで感謝の気持ちを伝えることができれ
ば、お互いの人生がより豊かなものになることでしょう。

☆このお話を読んで

あなたは冒頭に紹介した宗忠の和歌をご存知ですか。

に✓を入れてみてください。

知っていた 知らなかった その他

「知らなかった」に✓をした方は、この和歌を一度声に
出して唱えてみて下さい。心地よく、簡単に唱えることが
できる感謝の祈りのことばです。ぜひお試し下さい。

あなたは最近、誰かに感謝の気持ちを伝えることがあり
ますか。その時の様子をぜひ教えて下さい。

